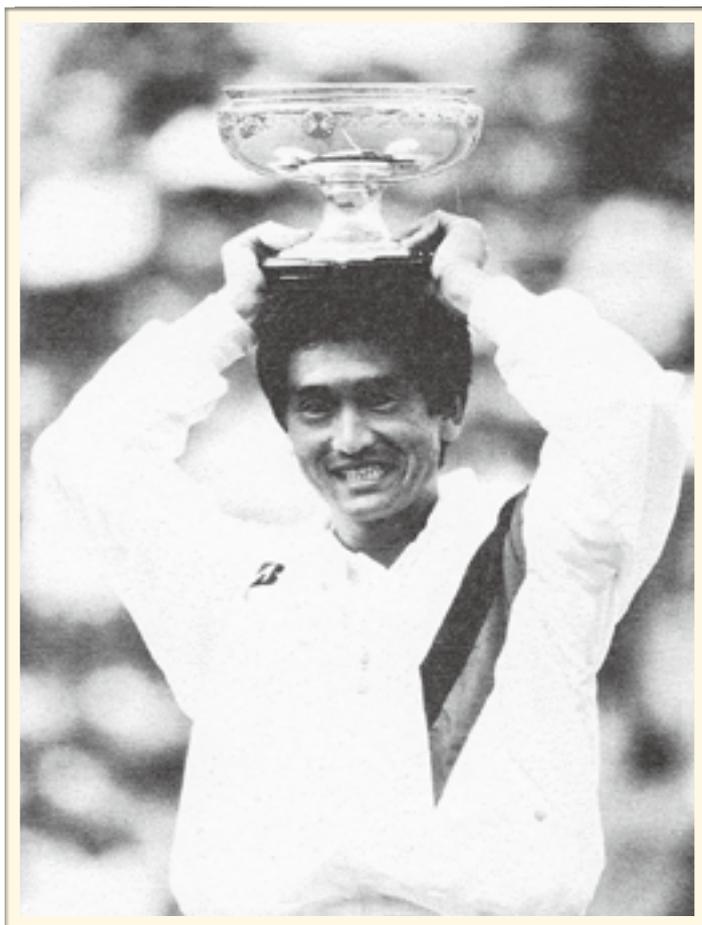




全日本テニス選手権大会



福井時代が始まった日 1



77年11月15日。晩秋のよく晴れた大阪・うつぼ公園だった。小振りなコロシラムのセンターコートで福井烈の全日本最多優勝は始まった。6-2、6-0、6-0。決勝で山本隆生を破ったスコアである。22年からの大会の歴史で、5セットマッチの決勝最少スコア（戦争中の42年大会とタイ）で、福井の記録は滑り出した。20歳はこの時点で最年少優勝記録でもあった。

柳川商高でインターハイ3連覇を達成した福井は高校卒業後、米国へ留学し、帰国しての出場だった。「日本選手と2年間プレーしていない。だから優勝なんて考えられない。どれだけできるか」だったそうだ。しかし、ドローには坂井利郎も神和住純も九鬼潤もない。強豪の引退やプロ転向で、時代の変わり目の大会。準々決勝の倉光哲戦が大きなヤマで、粘り抜いてフルセットでここを突破した後は一気呵成だった。後年、山本隆生と話した際、決勝経験の差を挙げられたという。高校時代からインターハイ、全日本ジュニアなど時々の頂点を競う場で磨かれた精神面の差だったのだろう。

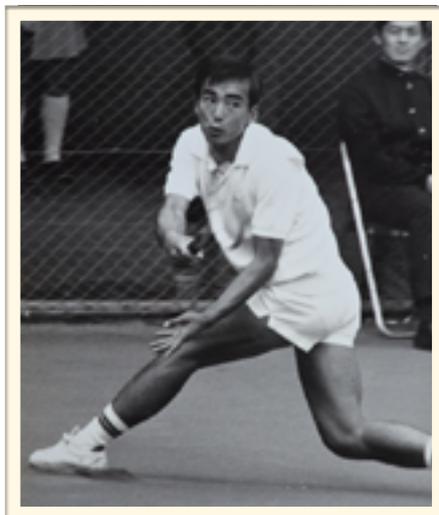
▲男子シングルス7度目の優勝
(昭和63年)

写真提供：ベースボールマガジン社



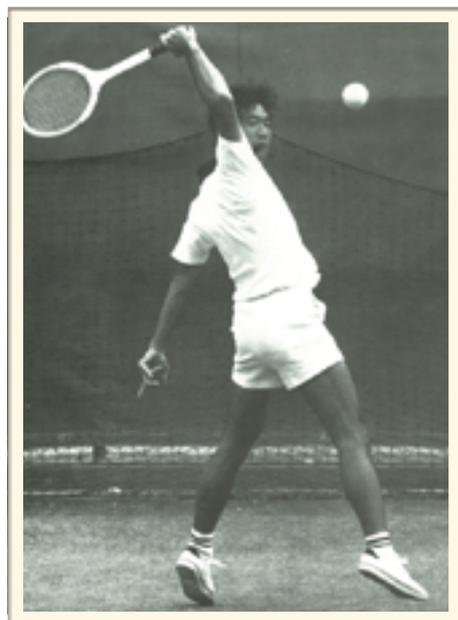
▲昭和49年～51年
男子シングルス2回、ダブルス6回
優勝の坂井利郎

写真提供：ベースボールマガジン社



▲昭和46年～58年
男子シングルス三連勝、ダブルス5回
優勝の神和住純

撮影：越智和夫



▲九鬼潤は昭和55年に神和住を破り
悲願の優勝を果たした

写真提供：モダンテニス誌

全日本テニス選手権大会 福井時代が始まった日 2

ただ、福井が本当の意味で日本チャンピオンを意識したのは、その2年後の全日本だという。プロへ門戸を開放したオープン化元年である。舞台は再びうつぼ公園。決勝の相手は九鬼潤。球足の極めて遅いうつぼのアンツーカーで、九鬼のストローク力に2セットダウンした。第3セットを奪ったものの、第4セットは4-5で九鬼にマッチポイント。ここで開き直ったそうだ。「粘って負けるのはいや。思いきりいこう」とネットに出る。九鬼のロブをスマッシュでたたきつけて窮地を脱した。最終セットは九鬼にケイレンが起り、福井が3連覇を達成した。

「あの大会が人生の分岐点。優勝したらプロになると決めていた。駄目なら大学（中央大）を卒業して会社員プレーヤー。英語が話せたので、航空会社の海外駐在を考えていた」。デ杯で日本を代表するプロは、ここが事実上の出発点となった。170㌾に満たない体ながら「日々、練習

しか記憶にない」と言う練習量で、俊敏なコートカバーから切り返す堅守のテニスを完成させた。

最後の全日本は91年。優勝する山本育史に準決勝で敗れた。77年からの15年間で決勝進出8度、優勝7度。「V7は自分の誇りであり、全日本への思い入れはすごくある。選手、ファン、協会が、これからの選手にとって意義のある大会にしていかなければならない。過去の優勝者全員に責任がある」と語った。

現在、選手からは、全日本は世界への通過点、との認識しか感じさせない発言が漏れる。「将来的には世界で闘った選手が戻ってきて日本のトップを決める大会になってほしい」。現在、日本オリンピック委員会（JOC）でリオデジャネイロ五輪の強化をこなう元「日本の顔」は、そんな風に全日本を見ている。

文：共同通信社編集委員 小沢 剛



**わが
ホープ
福井 烈**

木全 豊子

校舎の中でスタートしたテニス

昭和43年2月、九州には珍らしく雪の降る日曜日の日でした。10数人のラケットを持った子供達が門司のテニスコートに集まりました。時々激しく吹雪くので、とてもテニスどころではありませんでしたが、みんな極々を真赤にしてコーチの几帳、二本松園氏の指揮のもと4面のコートを開け回りました。この時スタートした子供達を私どもは4年組と呼んでいます。

西(TSUYOSHI)もこの中の1人です。西を43年度初めてトーナメントに出してみました。その時、佐野聖選手(当時柳川高校)に4-6で敗れています。翌44年には、小学校6年生で全日本ボーイズ出場のチャンスをつかみました。

池田市の伊勢道子さんが現えるからとのことで、一人で選ばれることになりました。(皮肉なことに1回戦で伊勢久純君に負けました。)上り特急列車のシートにチェックと押って帰国の本などひろげて、見送りの同僚や私にもっと謝れながら帰って行った西が、2年後には全日本ボーイズのチャンピオンになったのですから(成長後の特選選手を選べる)、どんなにほめてやってもほめ過ぎることはないと思います。

約年は烈にとってラッキーなスタートでした。正月別府トーナメントでは、永山選手(関大OB)を破ったのを応酬りに全日本幼年、近畿中学、全九州幼年、北九州C級、北九州少年と若んが幾度もかかってとれないタイトルを、すべてこの1年で一人占めしてしまいました。

さて、これからの問題です。進学之年となり、約年のテニスの試合、マラソンでお転勤の方がいささか犠牲になった面もあるそうで、この1年はテニスのための遠征道りが一番大事な時期と思います。何とかうまく両立させて、秀留する道に邁進せよと両親はもちろんのこと、長兄、二本松園コーチも心にかけておられます。

彼の子供達も悩みは一緒です。機会がありましたら全国の皆様の良いお話を聞かせてくださいませ、私達の参考にさせていただきたいと思っています。

「福井などに負けるな」と後を追ってくる君のために是非お聞かせください。

(筆者は昭和12年度、13年度全日本シニアランキング第1位。現在、門司市で「ユタオスポーツ」を経営。)




▲福井は14歳の時には既に日本の“ホープ”として期待されていた(モダンテニス No.14)